

川越郷土
獅子舞
由來記

附
川越案内



inches
cm

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13



Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

KODAK Color Control Patches



KODAK Gray Scale

© 2001 Kodak. All rights reserved. TM, Kodak, K107081B

A

1

2

3

4

5

6

M

8

9

10

11

12

明治神宮外苑ニ建設セララルル日本青年會館落成シ本月二十六日其ノ開館式ヲ舉行セラル、ニ當リ郷土藝術振興ノ爲メ全國各府縣ヨリ古來傳統セ
ル舞踊歌唄ノ類ヲ募集シ其ノ優良ノモノ數種ヲ選定シ出演セシメラル我
ガ川越市石原町簾獅子舞幸ニ其ノ撰
ニ入ルノ名譽ヲ荷ヒタルヲ以テ關係
者一同明治神宮ニ參拜シ社前ニ於テ
此ノ獅子舞ヲ奉獻シ然ル後出演スル
コトニセリ依テ此ノ舉ヲ記念スル爲
茲ニ本由來記ヲ編シ關係者ニ願ツ

大正十四年十月

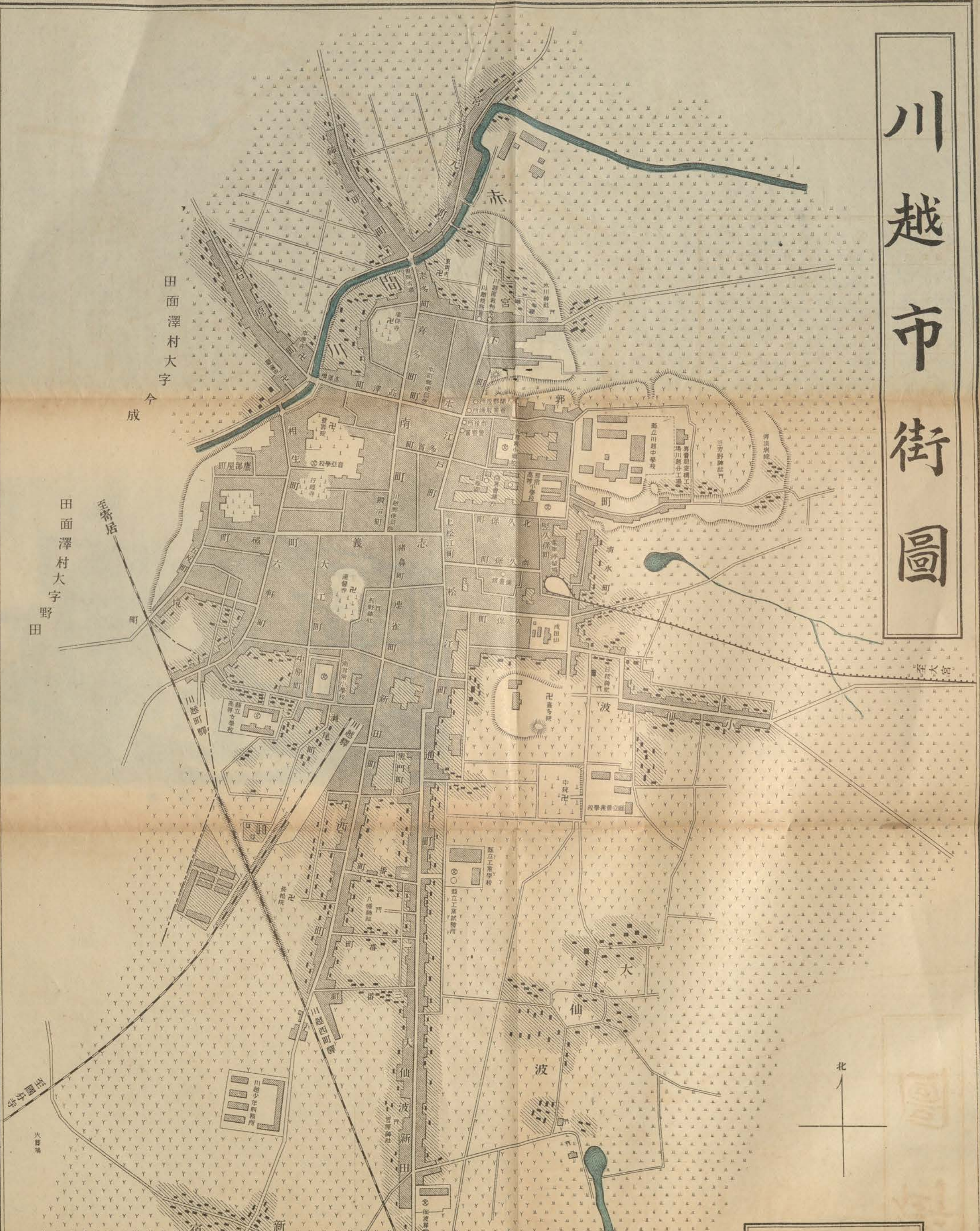
川越郷土簾獅子舞後援會

序



15

川越市街圖



北

例

凡

街圖

今成

田面澤村大字野田

至客店

至大宮

北

例 凡

車電	道鉄	界字大	界村町市
梁橋	塘堤	川池溝	路道
	屋家	田	畑
署公官			
地墓院寺	社神	校學	局便郵

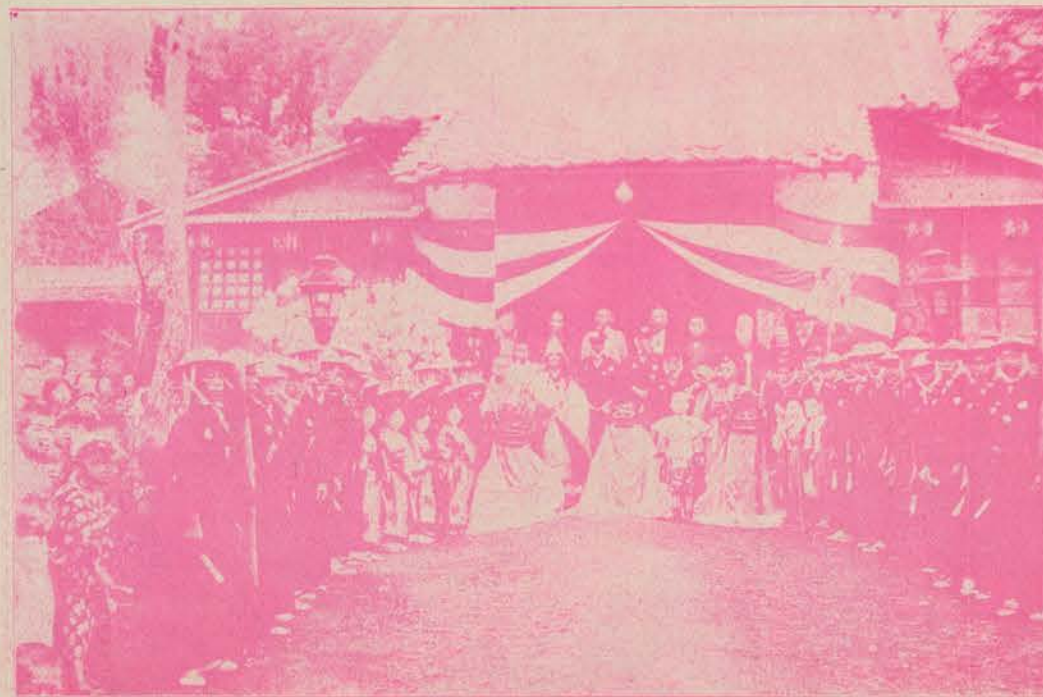
0 町 25 町 5 町 10 町

23852
力



川越市役所

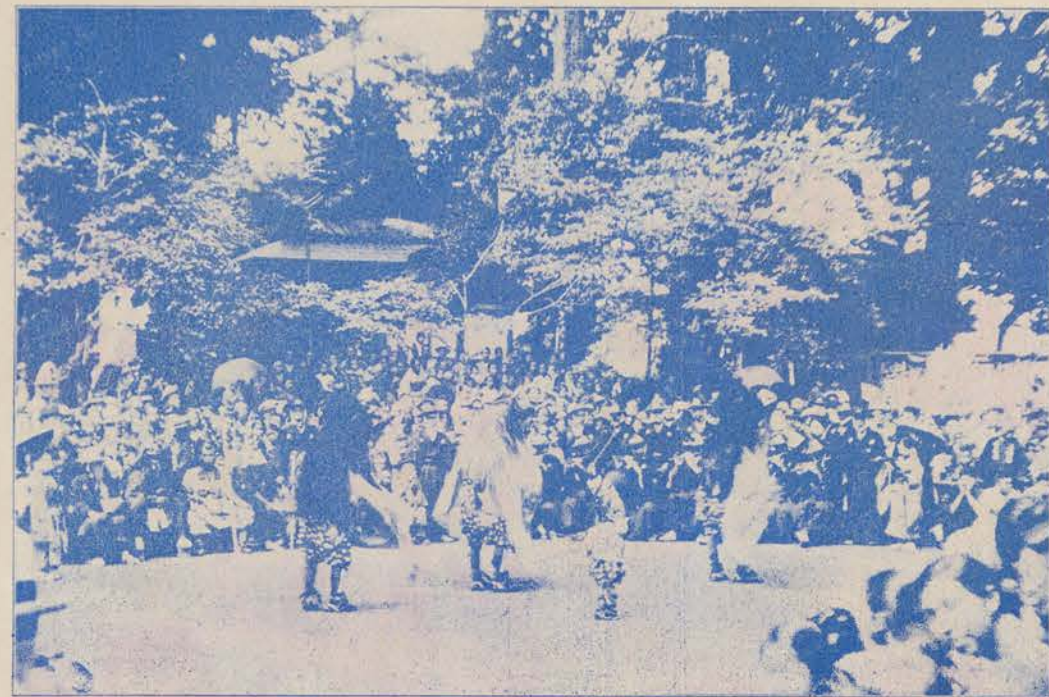




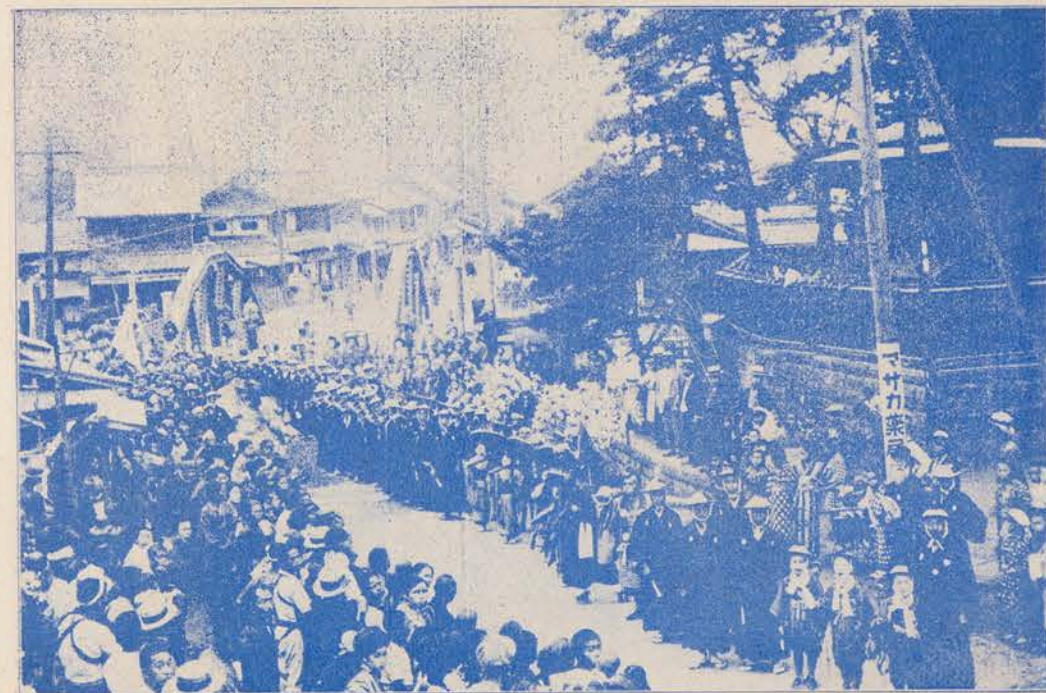
川越市原町観音寺境内獅子舞出演ノ景



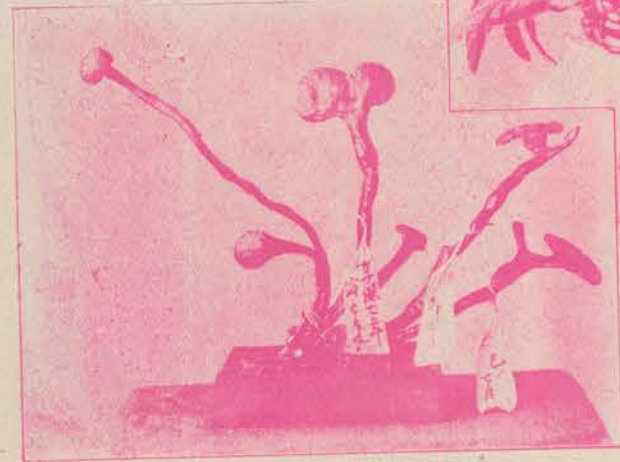
川越市街ノ景



鎮守氷川神社ニテ獅子舞演ノ景



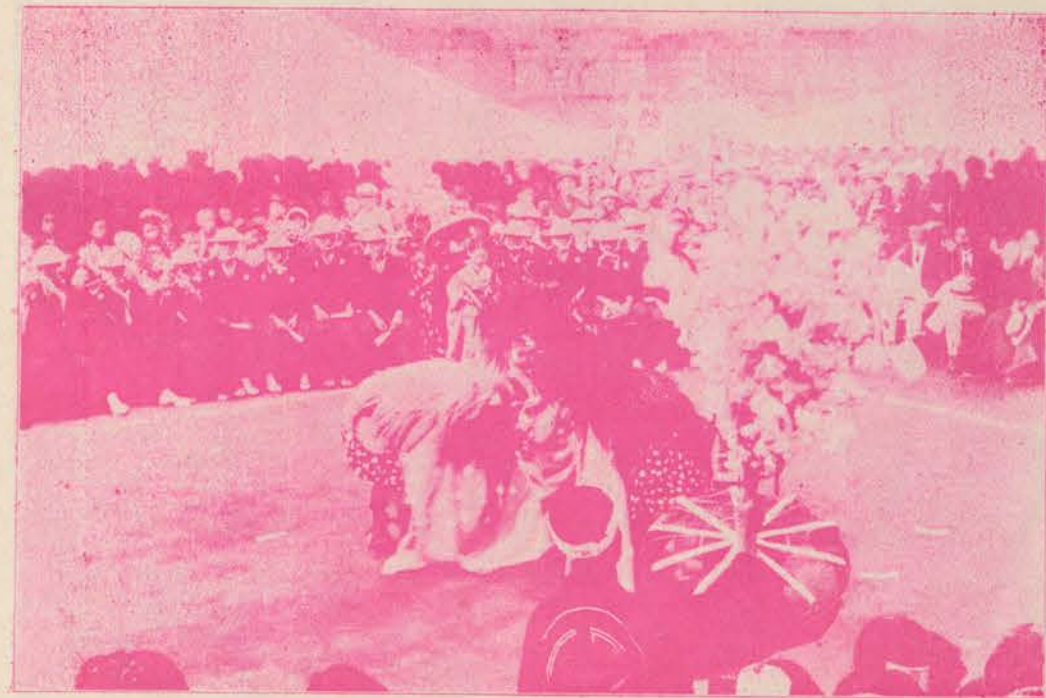
川越郷土獅子舞高澤橋ヲ渡ル景



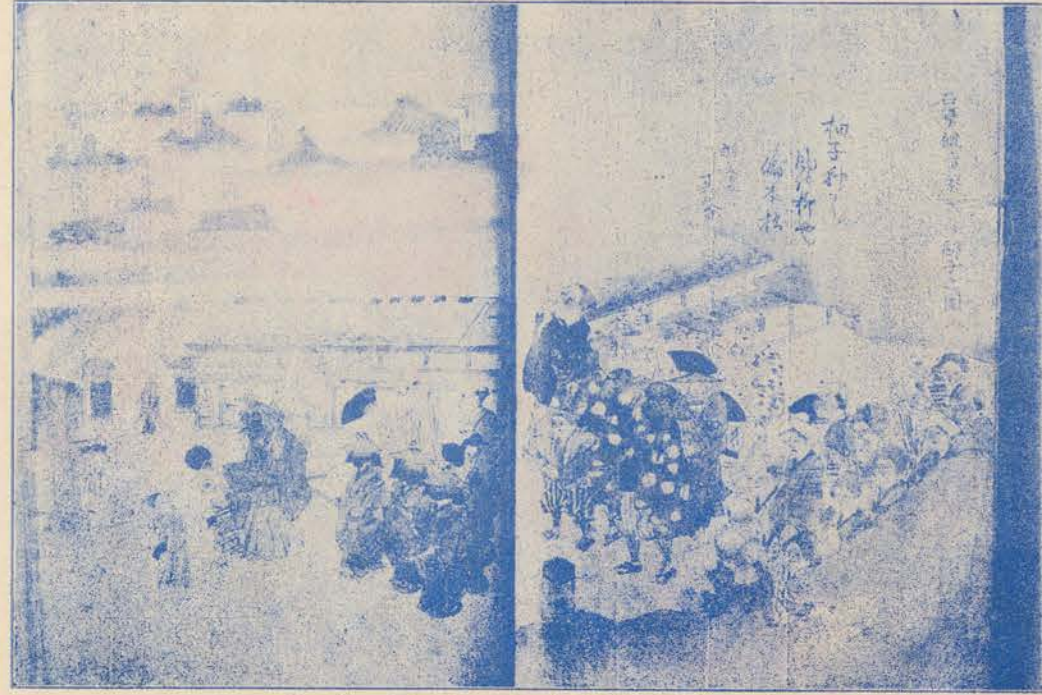
芝罘シセ生リヨ杜親藏大家上井



獅子三體 (善吉作)



景實ノ舞演子獅龍



享和元年辛酉歲觀音寺例祭ニ於ル獅子舞ノ圖

川越さゝら獅子舞由來
郷土

川越市石原町高澤山妙智院觀音寺は比叡山の末寺で、弘法大師の草創にかゝり慈覺大師の再興せし所、而して長くも御水尾天皇の勅願所である。本尊は大悲觀世音菩薩、昔より歸依の老若男女數多くあるが、後陽成天皇の慶長十二年三月、今から三百十九年前當寺で普門品の經旨に則り、惡魔を降伏し、災難を消除して國利民福を祈り上下をして齊しく平和を謳歌せしめようとする趣旨に基いて觀音祭に獅子舞を演じたのがそのまゝ、今日に傳はつたのである。

それ以來之を例祭と定めて特に村祭（今は町祭）とし毎年三月十八日（曆の改正により明治初年後は四月十八日に變更）に演舞することとなり、その都度川越城内に入つて惡魔降伏災難消除の祈禱を例とし、又領主からは、當日祭祀料を賜はつたのである。

ところが、寛永十一年、慶長から丁度二十八年目に、時の領主讃岐守酒井忠勝侯が若州小濱へ國替となつた折、侯は獅子三頭の中雌雄二頭を携へ行かれたため、雄一頭のみとなり、従つて舞技を演ずることを得ず、寛永十一年から寶永六年まで七十一年の間は自然中絶の有様となつた。

抑も酒井侯は代々觀音に信仰が深かつたのであるが、わけでも忠勝侯が斯く獅子舞を讚美愛されたのは、一つには侯

の代となつた最初の年即ち寛永四年三月例祭の朝、城内に於て演舞せる折柄圖らずも幕府の上使に接し、十萬石加増の恩命を蒙つたといふ因縁からである。この光榮に浴して以來、侯の觀音に對する信仰、獅子舞に對する讚美は益々深くなつた。そして國替の時には獅子のみならず演技に熟達せる者數名を引具し、之を關東組と稱して扶持米を給した。尙又臣下に命じて技を練らしめ、觀音寺の祭と日を同じうして祭禮を行ひ、武州在城の當時を偲ぶすがともせられたが、その當日又もや加祿の吉報に接し、かつ大老の重職に任せられたので信仰心は更に深くなつたといふ。

口後明治二十七年四月若州小濱舊領主酒井忠道侯當所、獅子舞を供覽せられ今尚ほ京都名物獅子舞として其名高き若州小濱の獅子舞踊の畫圖を贈られ後代に傳ふる處となりて渡邊竹次郎氏の家寶として保存せらる。

□この舞は、雄獅子二頭と雌獅子一頭とが笛樂にあはせ、笛の聲、鼈の音（この役をさゝら子というていづれも十二三歳の少女）に和し、羯鼓を拍ちつゝ、天狗の面を被つた先達、頭巾、條懸姿の山伏、獅子を左右する山の神（これは十一二の男の子が扮する）と共に質朴優雅な情調で演ずるのである。

□この祭禮を若し缺くやうなことがあると、村内（町内）に不祥事が偶發するといつて、毎年人々は擧つて力を入れ、各々装を凝らして祭に加はるので非常な賑ひを呈する。

□獅子の雌雄二頭は高澤町の井上家より奉納したものであつてそれがため中絶の已むなきに立到つて居つた獅子舞も復興の機運を得たので、村民はいたく喜び、直に演舞者の人選をなし、當時舞技を以て知られた太田ヶ谷村に往つて傳授を請ひ同年三月愈々祭事が復活した。而して其の後の演舞には必ず石原の北はづれに立ち、西北に當る同村に向つて一庭を行ふことに定めた。それは同村に對して感謝の意を表する心からである。

□さて井上家から獅子二體を奉納したに就いては次のやうな話がある。當時の主人はその二代に當る人で（初代から十二代目が當代の勘兵衛氏で、現に高澤町に居住し、もと明智光秀の臣で、天正十年六月本能寺の變が起つた時、丹波國篠山から此の地に引移つて長木屋（材木店）を營んで居つた。ところがその番頭に半右衛門といふ大酒のみの怠けものがあつたが春の一日不圖姿を晦ましてから絶えず消えるが如く店さきから見えなくなるので、主人は彼が若氣から酒色に耽溺してゐるのではあるまいかと疑念を抱いたが格別とがめだてもせず居た。かくて一年の月日は流れ去つた。或日のこと主人が何氣なく大藏にはひると、隅の方に異様なものが臚に見える、怪しみ近寄ると意外にも雌雄二頭の獅子の桐の木彫、それは黒塗の雄、金箔塗の雌、そして雄は東天紅（鶏の一種）の尾羽を以て鬘としたものが木屑の散亂してゐる中に完成さ

れてゐた。彼半右衛門は抑々何の目的あつて、斯うした事に人目を忍んで迄も一年といふ長い月日を費したのか、それさへ既に大なる驚と疑とに値するであらう。然も匠の技には何等経験のない彼が、藝術品として鑑賞するに足るものを獨力製作し得たことは一の奇蹟であらねばならぬ。此の事實にまのあたり接した主人の疑惑に對する半右衛門の答の意味は斯うである。

□他人の除災興樂といふ事を衷心希望し、茲に一念發起して獅子頭二面を彫刻しようといふ誓願を企てた彼は、即日齋戒沐浴密にその作に従事することとなつた。黙々として刀を揮ふ彼の念頭には、もとより春花の匂も秋月の輝もなかつた。餓を覺えれば則ち少量のかき餅を口にし、一年の日子を費して漸く完成したのであつた。

□此の事實を聴知つた主人は、その奇特な行を深く嘉し、觀音寺に納める事にしたのである。毎年祭日に井上家よりかき餅を振舞ふのは右の謂れからである。

□こゝに奇瑞ともいふべきは、其の後享保年間に至つて彼の大藏の親柱の下から靈芝が二本宛四年間引續き生じたことである。同家では現に家寶として秘藏しつゝある。

□尙又弘化三年三月に至つて、同家の小僧善吉といふものが彼の半右衛門に見ならつて獅子頭彫刻を思ひ立ち、薪を材料として苦心に苦心を重ね、幾度か失敗した後漸く小形のもの三面を作りあげたといふ。これも同家の珍品となつて居る。

鼈獅子舞の歌詞

太鼓の胴をキリリと締めて

鼈をサラリとすりこめさいな。

向ひ小山のうら／＼雀

羽先を揃へてきりかはさいな。

此の宿は縦が十五里横七里

入りをよく見て出場にまよふな。

松山の松にからみしつたの葉は

縁が切れてはほごりほこれぬ。

唐から下りし唐繪の屏風

サラリと一間へ立て廻はさない。

武藏野に月の入るべき山もなし

うばのかくれに月はよこ雲。

十七のむねにかざりし光り物

一つくさい國の土産に。

十七のかみまく姿を見れよ見れよ。

今の櫛をば手をちがへた

やれ出たそれ出た龜の子が出たよ

親ももぐれば其の子ももぐる。

鹿島からきりをきりとせめられて

習ひ申した鹿島きりゑばうし。

此の宮は九間八つ棟檜皮葺き

雄鶴雌鶴が棟にとまりやる。

日はくれる道の根笹に露が浮く

おいとま申してもごる獅子しごの。

簾の長すり簾の長さ

簾をさらりとすり初めさいな。

筑波山中は籠山花咲いて

花を眺めて遊ぶ獅子ごの

簾の長すりさゝらの長さ

さゝらをサラリとすり止めさいな。

千秋樂には民をなで萬歳樂には命を延ぶ

あひに相生の松風さつゝの聲ぞ樂しむ。

簾獅子舞解説

第一、行列次第

1. 警固 二人

陣笠を戴き黒紋附に袴、紋は川越市石原町に因み石の字を丸く便化せるものを用ふ。

2. 錫杖 童子二人

拍子木 童子一人

3. 警固 四人

服裝前驅に同じ

4. 山伏 一人

柿の衣に頭巾、篠懸、切草鞋に戒刀を佩び、惡魔降伏の金剛杖を手にし、吹き鳴らす法螺の響に百獸戰いて道程の安全を開く

5. 天狗 一人

朱而隆鼻の天狗、澁染の直垂に、丹の衛府の太刀を帯び、舞樂用の鳥兜を冠り、高き齒ある足駄を穿き、右手に破邪顯正の萬燈を杖づき、左手に飛行自在の羽團扇を携ふ。

いふまでも神の使者たる天狗に、天孫降臨に際して導き奉りし猿田彦命を加味した意だと思はれる。

6. 天女 簾子の役 四人

八九才から十一二才までの童貞の少女で、牡丹に獅子を刺繡せる振袖を着、櫻花咲亂れたる絹蓋に、金の小鈴をつけたるを翳し、(介添これを捧ぐ)簾子を手になでつゝ進む。

舞樂の時四隅に立つ、前列二人の花蓋は、日輪、月輪

を像ごつて居るものである。
箴子には粗密兩種あつて、箴と太鼓に合奏する音は、深山の奥の老松が風に唸んで「相に相生のさつ」の聲」かのやうに思はせる。

7.

諸方 六人

服装は警固に同じ。

8.

箴 十人(又は八人)

服装は警固に同じ。

9.

天童 一人 (二に山神といふ)

八九才から十一才までの童貞の少童で、黒地に牡丹に狂ひ獅子の金糸の刺繡せる古代肩衣に、伊賀袴を着け、籠手、臙當、切草鞋に身を固め、軍配團扇を左に五色の采配を右に執つて居る。

これは獅子舞中最も重いもので、その一舉手、一投足と、軍配と采配の一上一下によつて獅子が活躍するやうに仕組まれて居る。要するに獅子の指揮者に相當するわけである。

10.

獅子 三頭

先獅子 (牡)

黒面金眼、金の蛭巻した黒く長き雙角に、黒き東天紅の尾羽を戴き、背後に數尺の黒き毛を垂れる。

舞士は金に黒く三つ巴を描いた太鼓を胸にして、伊賀袴に切草鞋、籠手、臙當に出で立つ。箴子の響き、笛の音に合せて太鼓を打ちつ、山神の指揮に濶歩舞踊をしながら續く。

中獅子 (牝)
金面金眼、頭角なく、額に寶珠を戴き、背後に數尺の白毛を垂れる。

舞士の樂具、服装、舞踊、總て先獅子に準じる。

後獅子 (牡)

朱面金眼、金の蛭巻した朱角、朱毛背後に長く垂れる。以下先獅子に同じ。

11.

警固 十人

服装前驅に同じ。

第二、獅子舞概説

獅子舞が悪魔降伏のために用ひられた事は、今更説くまでもない。唯こゝでは、わが箴子獅子の踊に就いての意義を述べるにとゞめるだけでよいと思ふ。
天女の花蓋にある日像、月像は、熙々たる春の日、蓬萊山の長閑けさを象徴し、その重きまで附けてある櫻花は、繚亂たる花園を意味して居るのである。
諸方によつて謠はれる「月の入るべき山もな」い武藏

野の、行けども果てなき曠野を闊歩する百獸王の足どり。そして「縦が十五里、横七里」の出場に迷ふ大都の繁榮に歡びの舞を舞ひつくして、「筑波山、中は籠山花咲い」た樹の下に、狂ひ狂ふ三頭の獅子は、やがて一頭の牝獅子を中に据ゑて、牡獅子二頭の亂舞となる。一勝一敗、敗れてはまた勝ち、終に和樂の大圓團に至つて、三頭相擁し、嬉々として戯れつゝ局を結ぶに至るのである。

第三、獅子舞詳説

獅子舞は一絲亂れず、終始一貫した舞踊ではあるが、これをその心持からして十二の場面に截切する事が出来る。今試にそれを笛樂の譜に合はせて解説をしてみよう。

○第一場面（笛譜そのものに何等意義を附すべきでないのは）

笛 チーリーラーロー ラーロロリ

千里 良 路 良 路路里

チーリーラーロロ

千里 良 良里路路

獅子 山神に導かれて三頭の獅子が千里の行程に就くべく、嬉々として演舞場に、行列花々しく繰り込む。

○第二場面

笛 チーラーララリ ララロロリ

千里 良里良里 良里路里

チーラーララロロ

千里 良里良里路路

獅子 演舞場に繰込んだ一行は、笛方は右に、諸方は左に、獅子は四隅に、そして他のすべては正面に座席が定つて、彌々山神の指揮のもとに闊歩飛行の態に入らうとする準備となる。

○第三場面

笛 トーホホシン シャリホホ

唐 歩 歩 砂 里 歩 歩

トーホホシンホホ シャーリホホ

唐 歩 砂 里 歩 歩 砂 里 歩 歩

ヒートトーテン シャリホホ

日 登 東 天 砂 里 歩 歩

トートシヤリホホ シャーリホホ

東 都 砂 里 歩 歩 砂 里 歩 歩

獅子、準備彌々なつて千里の行程が開始せられる。大足に闊歩して三頭入り亂れて飛行する。山神その間に軍配を挙げ、采を振る。獅子の先にたち。後へに廻る。獅子従うて舞ひ、従うて踊る。

○第四場面

笛 シーシヤ シャロロシヤ

獅子 子 哉 砂 路 路 砂

獅子 三頭一線に躊躇して少憩をしながら舞踊の動作をつゞける。

○第五場面（小唄といふ）

笛 小唄

第一、此の宿は縦が十五里、横七里
入りをよく見て出場に迷ふな。

第二、武藏野に月の入るべき山もなし

うばのかくれに月はよこ雲。

(うばは尾花の轉訛したものであらう)

第三、筑波山、中は籠山花咲いて

花を眺めて遊ぶ獅子どの。

獅子 この場面を小唄といつて、大都の繁榮を歡び曠野の果なきに狂ひ、花に戯れる状態に入る。

○第六場面

笛 第四場面を繰かへす

○第七場面 (長唄さいふ)

笛 長唄

獅子 小唄に類して居るが、唯すべてが暢び暢びとして、悠々迫らず、日月煦々とした櫻花のもとに遊樂の態に入る。

○第八場面

笛 第四、第六の場面を繰りかへす。(但し太鼓は三つ打ち)

○第九場面

笛 オーオーカ シャキ
追 追 鹿 砂 喜

獅子 次の場面の亂舞に入らうとする準備。

○第十場面

笛 シーシー オーシャシャ
獅子 追 砂 砂

獅子

シーシー オーシャシャ
獅子 追 砂 砂

先の場面で準備を終へた獅子は、彌々この舞樂の主眼點である亂舞に入るのである。

先づ四隅に立つて居た四人の獅子は、前面に横一列となり、日月更に輝きを増し、櫻花一層の艶を添へる。中獅子(牝)はその爛漫たる花の樹下に立つて居るのを中心として、先後の兩獅子は五回に涉つての亂舞に入る。

先獅子三回の勝を制し、後獅子二回の勝を取る。中獅子中に交りて終に團樂の舊に復し、洋洋和樂の狀に還る。

この場面は本舞踊中の眼目で獅子の狂ひ、山神の指揮、太鼓の響き、獅子の音に和し、笛聲その間を流れ、壯にして麗、雅にして純、素朴なれども優雅の掬すべきものあるを覺える。

○第十一場面

笛 第四、第六、第八の場面に同じ

獅子 第十二場面

笛 テーリーラーロー
千里 良 路

獅子 第一場面に同じく、千里の行程を了へて優々闊歩、歡樂の中に歸途につく。

●獅子役割

獅子

正

岸田臺吉
小峯平八
渡邊雄太郎

笛人

副長

栗原喜三郎
眞仁田武次郎
小峯一郎
小林濱吉
戸田金右衛門
大久保清五郎

副

齋藤富士太郎
栗原平吉
鈴木兼吉

獅子掛

班長
副長

堀口常太郎
山崎春吉
本澤關之助
黒田金太郎
越中鶴吉
平田伊左三
岸信吉

山之神

白砂政次
井上信夫
渡邊憲夫
鈴木正敏

山之神付添

渡邊彌三郎
白砂勝次
井上長平
鈴木和三

獅子

岸田たか子
齋藤ふみ子
山下はる子
石川いし子

獅子掛

岡田一
岡野恒次
山崎留吉
新井蒔吉

歌人

班長
副長

村田茂吉
戸田仁吉
新井伊勢吉
大室宗平
戸田峰吉
根本泰次郎
白木久一郎

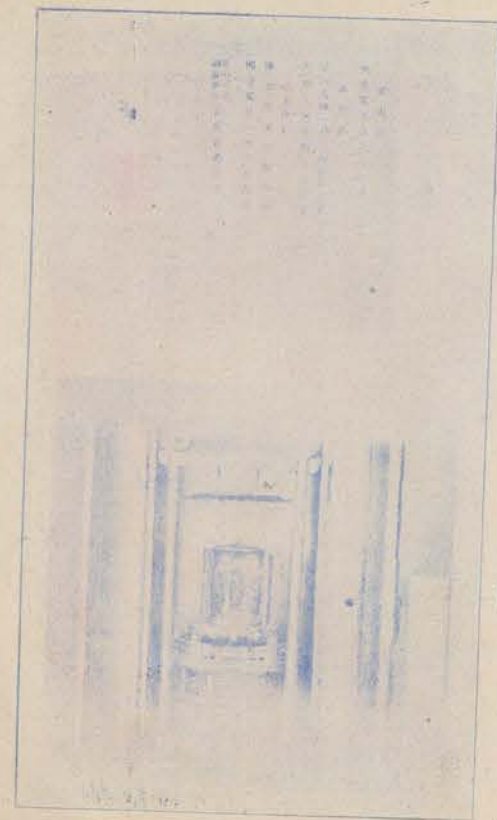
顧問

團長

岸市五郎



川越總鎮守縣社氷川神社ノ景



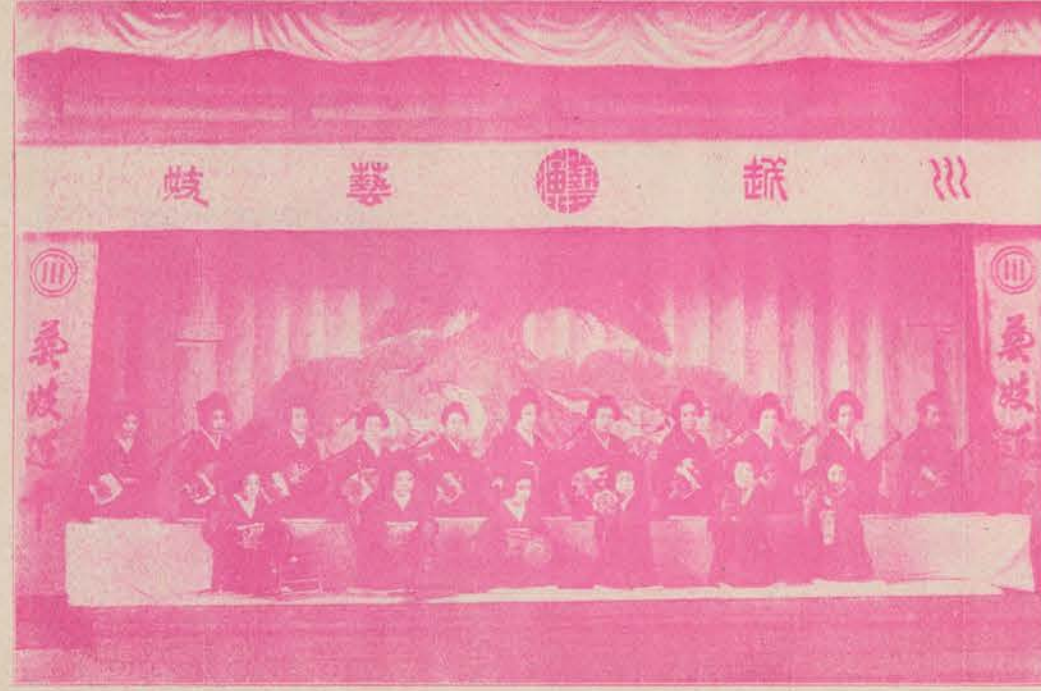
後水尾天皇御持佛圓浮提金一光三尊如來



高澤山觀音寺什物山越彌陀ノ圖



縣社三芳野天神宮ノ景



(出演役割)
〔地方〕〔下方〕

久良吉

金花

巴

梅龍

梅奴

一松

ひろ

菊丸

東吉

まめ子

八重

玉吉

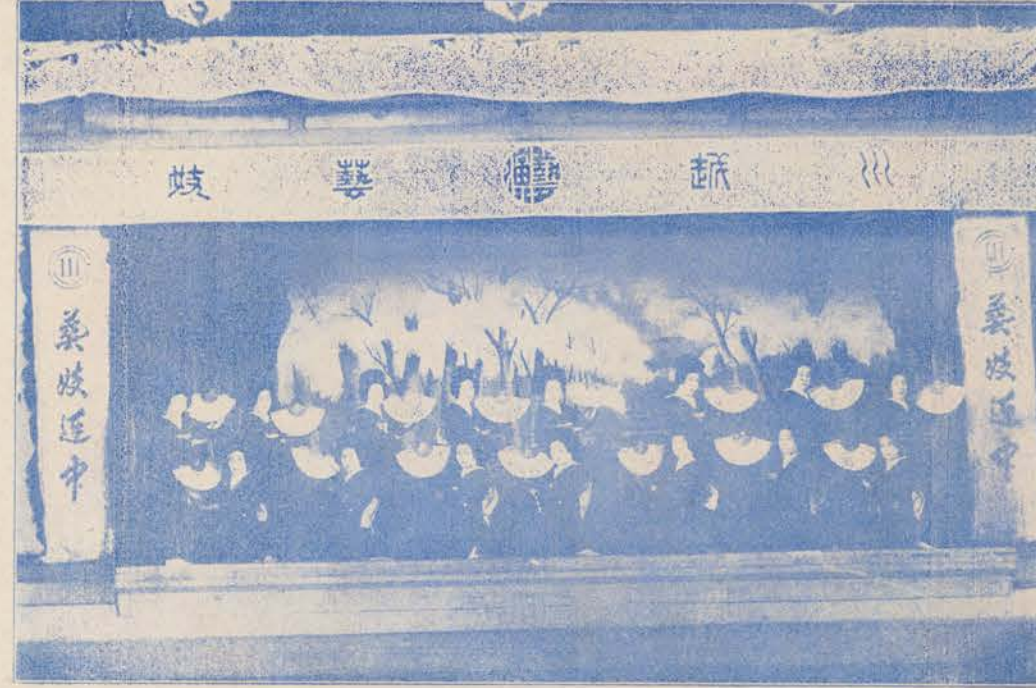
香の子

千代吉

福助

喜久葉

米次



(出演役割)
〔踊〕

吉 彌 松 子

秀 葉 好 奴

鶴 松 甘 松

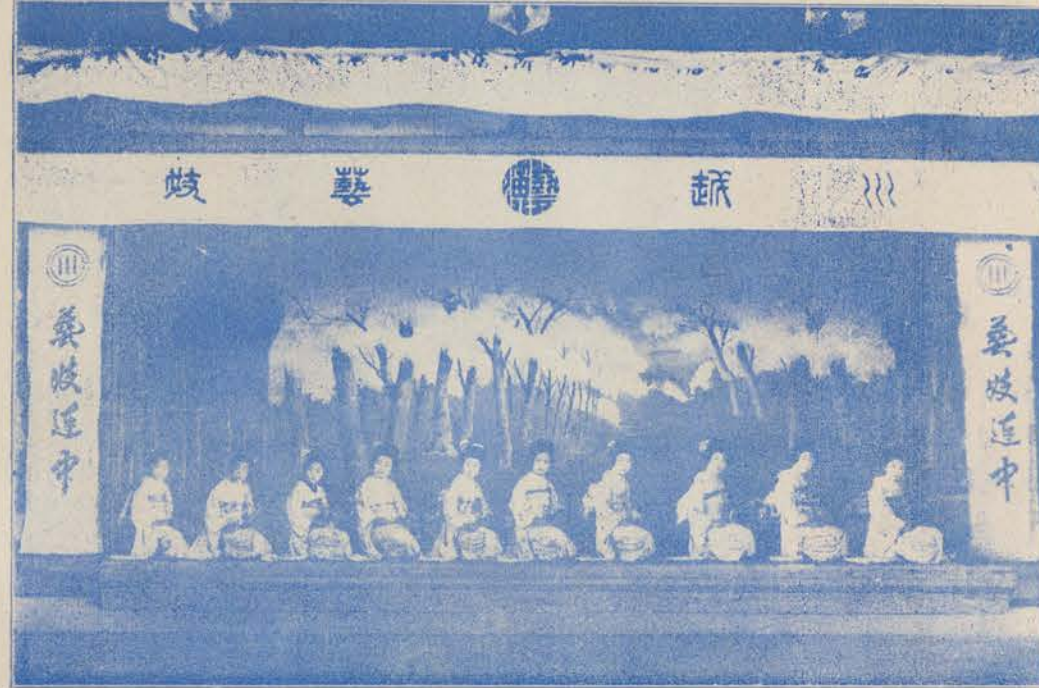
政 彌 わか葉

壺 子 かるた

力 彌 老 松

榮 龍

榮 龍



(出演役割)

〔踊〕

壽々丸

種 子

小 ぞめ

玉 龍

千代丸

鷹 丸

音 丸

メ 子

梅 香

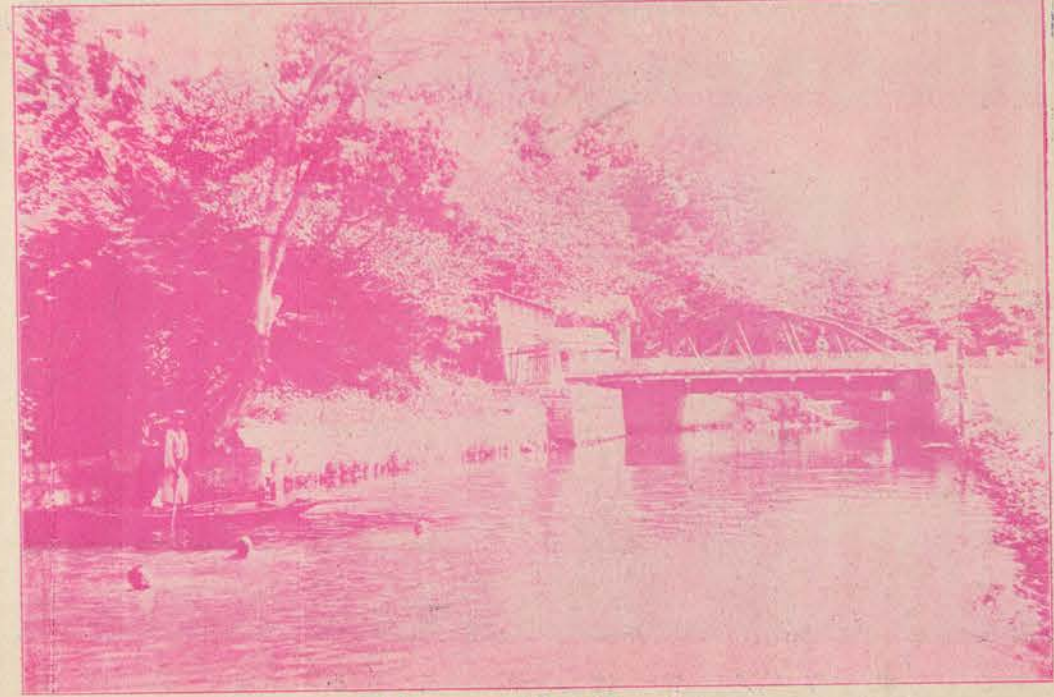
咲 子

頭取 綾部利右衛門
 副取 山崎嘉七
 取締役 神島瀧藏
 同兼 淺野拾治
 同兼 會川緒治
 同兼 菅田正吉
 監査役 山田房吉



埼玉縣川越市
 株式會社
 第八十五銀行本店
 電話川越四八七〇番

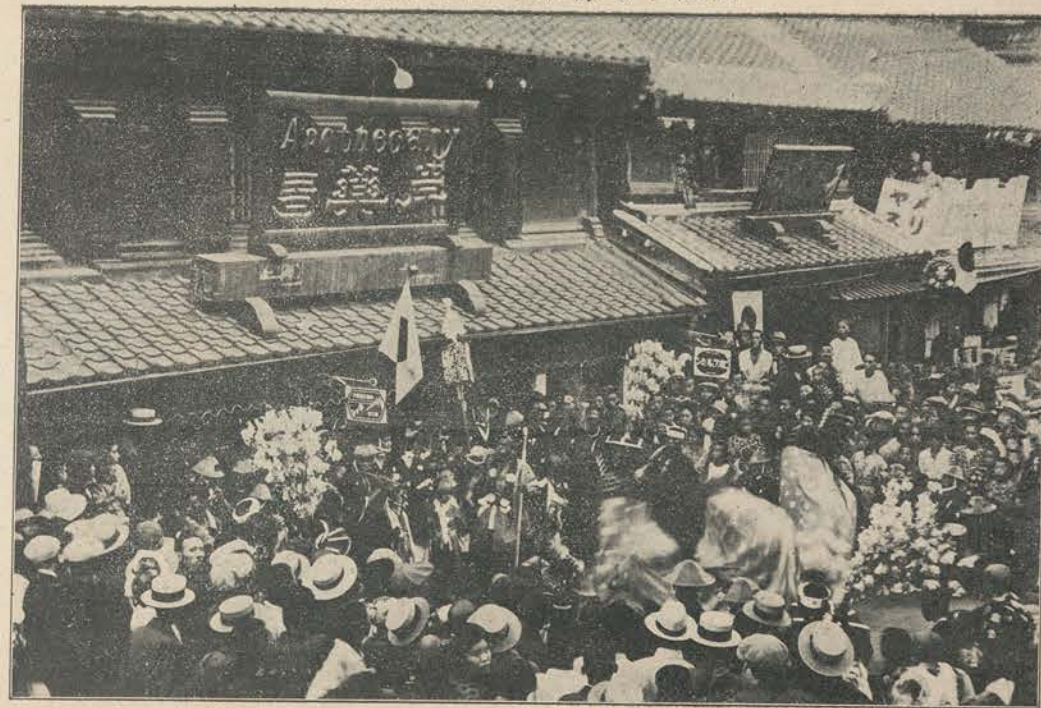
資本金 參百萬圓
 諸準備金 壹百七拾九萬圓



赤間川ノ景



局藥岸ト舞子獅籠物名越川



局主

帝國大學
藥學專攻
藥劑師

岸

市五郎

電話川越三三〇番

市越川縣玉埕
 元造釀酒清印山鏡
 號屋舂舂
 吉榮內竹

電話川越〔百十三番〕
〔百十四番〕

釀造元

灘御影

嘉納合名會社

大日本酒
登錄商標

白鶴

特約店

川越市猪鼻町

畑尾源七

(電話川越五〇番)

全國農具共進會壹等賞受領
農林省優良農具推獎品

武州特產 **チヨダ式稻麥扱機**



川越市驛前

木屋製作所

電話 二百十番
四百四十四番

會席御料理
仕出
初音屋
電話二六番
川越市本町

清遊あれ 川越市へ!!

賞鑑あれ 龜屋の名菓

由來を遠く尋れば天明三年世に擢てて斯業に盡せしを端緒とし幕政の時代には龜屋河内大榉藤原嘉永と呼ばれて久く川越侯の御用を拜し維新後に至ては江湖の後援益深きを加へつゝ舊城主の古歌むかし忘ぬ初雁の聲に因める 龜屋創製の初雁焼が大正元年畏も天覽御買上を蒙りて其屋號に一段の光彩を添しを始めて越て大正四年御大典乃際には特に撰れて本縣御饗儀用御菓子御用拜命の一大光譽を荷ふなど誠に感激に堪ず願くば向後倍舊御愛用の榮を賜はん事を

初雁焼

若紫

御城落雁

武藏野

初雁霞



(店 常)

天明三年創業



龜屋

埼玉縣川越市
電話川越四五番
振替東京一三三二九番

舊藩時代當店使用の御用札並に御用箱



磯部煎餅
名所煎餅
軍人煎餅

埼玉縣川越市高澤町

大日本パン啓商店



元祖
ボレート栗
本舗

鈴木啓三郎

電話 四四三番
振替東京五九五四一番

賜金銀賞牌
有功賞牌

名菓

元祖紅梅焼
甘藷煎餅
甘藷製菓各種

總本舗

川越市鍛冶町

御菓子老舗
小松屋



仁村福太郎本店

電話川越百三十六番
振替東京四〇一九三番

和洋菓子食料品各種

川越市代表名菓

甘 諸 羊 羹	甘 諸 あ ら れ	甘 諸 煎 餅	甘 諸 の 花	商登 標録 月 見 糖
------------------	-----------------------	------------------	------------------	-------------------------

元祖製造發賣元

川越市多賀町

福呂屋總本店

電話川越二五一番
振替東京四五九二八番

各種

和洋御菓子

川越市本町

豐玉堂

電話三三四番

埼玉県川越市宮元町



岩田兄弟製菓所

埼玉県特産川越芋菓子
製造下販賣ニ關スル附
帶事業一般

武州川越連雀町（蓮馨寺角）

菓子舗 大黒屋商店

電話川越三七五番

森永製菓株式會社 佐久間製菓株式會社 專屬特約店

川越名産甘藷製菓初雁みやげ製造元

清洋堂本店

濱中喜三郎

川越市南町

埼玉縣川越市高澤町

荒物 疊表 卸商 清水友右衛門

電話川越一三〇番
振替東京四一七八番

【姓名イロハ順】

川越市南町

筆家漆器

市川筆笥店

電話一七六番

川越市志義町

池田屋號

筆塗物



池田保之助

川越市通町

筆笥商

岡村辨太郎

川越市連雀町

筆笥商

岡村金助

川越市連雀町

筆家漆器

岡村筆笥店

店主 岡村久治郎

川越市中原町

筆桐材

川越工業株式會社

電話四七九番

川越市小仙波町

筆笥商

川上幸吉

國產埼玉筆笥元產地川越筆笥商組合

御用命ハ是非當組合へ御願ヒ申上候

國產埼玉管元地產川越管商組合

御用命は是非當組合へ願御上候

【姓名イロハ順】

卸管

米

川越市志義町

高橋米吉
電話三五三番

塗管 金庫物 什器

仙

上州屋管店
店主 栗原孝次郎
本店 喜多
電話一三三番

埼玉特産 二管 間屋

埼玉縣川越市

矢島三之助
電話五二三番

塗管 家具

松本

米吉

川越市志義町
横田屋本店

管油 釀造元 味管 卸商

松本新次郎
振替口座東京三六〇一
電話川越四百三十二番

川越市松江町
桔梗屋號

塗管 物

全

關根榮吉
電話川越三百四十七番
電信略(ヤマキ)

塗管 家具 物

小

杉田屋管店
川越市鍛冶町
電話五〇四番

美味 千萬歳

標商録登

埼玉縣川越市

酒

川越代

元造醸名坂商店

旅館

川越

佐久間

市上

松喜

江代町

(電話二十番)

川越

市

山家

南

町

電話
四十八番
川越

會席料理

酒醬油類商



本村屋号
全水藤次郎
 (電話九十番) 市越川縣玉埼

川越市時計商工組合員

本町	可兒	可兒	本町	猪鼻町	連雀町	多賀町	鍛冶町	志多町	南町
可兒	可兒	永倉	松崎	松本	坂本	坂本	坂本	坂本	坂本
電話一五	電話一五	電話五〇九	電話三	電話三	電話三	電話三	電話三	電話三	電話二七五
支店	支店	支店	支店	支店	支店	支店	支店	支店	支店

川越市

藝妓音頭

主宰者

木崎守長

川越市神明町

炭吹鑄物製造元



小川五郎右衛門

電話 二二番
振替東京三六七七番
電信略號【〇フキ】

營業課目

活版、石版
活字製造
洋式帳簿
其他諸印刷

町田新市越川

青山印刷所 株式會社

電 話 三 一 一 番

川越織物年産額

價格	四百萬圓
數量	壹百五十萬反

買繼商各種織物

◎埼玉織物同業組合川越區員

幹事

區會議員

合名 高山商店

田島德次郎

原田利七

淺海彌吉

松本源之丞

橫山五郎平

間
仁
田
乙
吉

帛書定吉

山下墮穴

山丁棣次良

齊藤武之助

高山太古

松澤松之助

星野末吉

橋本四郎

岩澤覺次郎

菅間正作

大野善太郎

井上平兵衛

大山安之亟

小林佐平

岡田金藏

笠間一之助

永倉助次郎

同 同
綿縮、絹縮、交織、海氣
京棧、海氣

染色業

同 同
區會議員
遠藤 茂
岸野正吉
岡野辰太郎
澤田鍋吉
內藤宗吉
原田利七
森田勝三郎
鈴木與三郎
對崎貞三
神田彦太郎
川上寅吉
井上惣太郎
小貝助七
內野平吉
早川佑三
新井喜代吉
帝國發明品
應用株式會社
橫溝代太郎
高野ふく
根岸彌四郎
平野半七

燃糸業

綿糸商

合名 丸上糸店
電話川越二二四七番

郷土鼈獅子舞後援會員 (順序不順)

綾部利右衛門
渡邊吉右衛門
石川仁平
山崎嘉七
鈴木徳次郎
伊藤長三郎
水村益三
矢澤四郎右衛門
小川五郎右衛門
小山三省
山崎覺太郎
原田要吉
木下藤次郎
清水友右衛門
大木彌兵衛
林友平
横關幸三郎
名坂喜兵衛
山田年風
吉崎寅之助
綾部清右衛門
菅間正作
岡常吉
綾部喜右衛門
田中庄右衛門

菅間定治郎
岩崎育太郎
瀧島重藏
高山仁兵衛
山本平兵衛
安齋羊造
田島留吉
神島瀧藏
落合市五郎
高山久兵衛
松山莊次郎
山崎善助
櫻井半造
大辻友太郎
小島金兵衛
松崎利平
瀧島藤五郎
榎本惣五郎
峯岸勝治
今井壽以
綾部清三郎
柴田善兵衛
加藤林之助
原田勝藏
佐久間喜代

新井長治
石川今次郎
西川庄九郎
松本新次郎
二村傳治
石山半次郎
水村常吉
松本伊助
小谷野喜太郎
問坂哲太郎
仲要次郎
竹內榮吉
篠澤菊之助
畑尾源七
小川菊太郎
關根平藏
武藤孝三郎
田中音吉
宮澤福造
鳥越錦三
吉田榮吉
吉田之助
中野鍋太郎
田島德次郎
淺海彌吉
染谷小赤
內河內藏壽
橋本定五郎

井上秀吉
伊藤米次郎
野々山喜右衛門
加藤元三郎
福田眞藏
會川絹治郎
淺野捨治郎
矢島利三郎
石山多助
井上馨
實淨泰俊
帝國電燈川越支社
株式會社青山印刷所
田中五郎兵衛
內田伊之助
關根榮吉
原萬治郎
長谷川才五郎
藤野勢之助
木崎本次郎
福田利右衛門
永倉秀之助
高橋幸助
高田瀧藏
戶山俊吾
印藤順造
桑村又吉
大塚釜衛

印藤元右衛門
鹿戸安太郎
內藤助治郎
永田保之助
染谷清四郎
岸野鶴之助
久津間元吉
船津長喜
沼田文次郎
栗原伊與藏
對崎長太郎
岡田健郎
小倉長三郎
小川士一
横川是哉
綾部恒之助
武田熊藏
渡邊竹次郎
井上勘兵衛
大野善太郎
木村猪之助
市川政次郎
山崎三之助
水口忠右衛門
島田傳助
神山幾之助
齋藤作造
村田太郎

阿部朔次郎
澁澤長平
田口吉兵衛
新井與四郎
鈴木清太郎
長島宗次郎
金子榮助
市川豐作
仁村福太郎
岸川金十郎
早川金太郎
豐田熊次郎
野村芳彦
今澤金藏
佐久間得三
村岡彌壽生
齋藤鐵五郎
神田要七
天笠正次郎
山田賢次郎
田村源次郎
山本喜平次郎
新井要造
鈴木啓三郎
戶田安次郎
相原芳太郎
森田芳次郎

市役所

市長	武田熊藏	主事	野村芳彦
助役	早川金十郎	同	今澤金藏
收入役	豐田熊次郎	視學	佐久間得三

市會議員

市會議長	鈴木德次郎	山内庫之助
同 副議長	綾部恒之助	船津長喜
市參事會員	內藤助治郎	石川仁平
同	久津間元吉	染谷清四郎
同	井上勘兵衛	栗原伊與藏
同	横關幸三郎	小山三省
同	綾部清三郎	印藤順造
同	高山俊吾	沼田文次郎
同	小倉長三郎	渡邊竹次郎
同	鹿戸安太郎	大塚釜衛
同	桑村又吉	戸田瀧藏
同	岸野鶴之助	對崎長太郎
同	永田保之助	高橋幸助
同	岡田健	印藤元右衛門
同	矢澤四郎右衛門	

◎川越商業會議所議員

會議員	綾部利右衛門	銀行頭取	喜多町	電話	三〇
同	山崎博之	會社重役	志義町		四六
同	鈴木德次郎	材木商	六軒町		八
同	渡邊吉右衛門	吳服商	鍛冶町		二六
同	山崎嘉七	菓子商	志義町		四五
同	岸市五郎	藥種商	神明町		三三〇
同	矢澤四郎右衛門	鑄物業	高澤町		三三三
同	伊藤長三郎	肥料砂糖商	喜多町		四
同	水村益三	米穀商	高澤町		七九
同	清水友右衛門	荒物商	連雀町		一三〇
同	印藤元右衛門	石炭商	六軒町		一六三
同	水村常造	機具農具商	北久保町		二一〇
同	大辻友太郎	紙類商	鍛冶町		一一二
同	石川仁平	製糸業	南町		四六四
同	綾部喜右衛門	金物業	喜志町		四六二
同	宮岡瀧造	織物業	神明町		二四六
同	小川五郎右衛門	鑄物業	坂上町		二二
同	會川絹次郎	銀行重役	大工町		四六一
同	戸田瀧藏	織物業	猪鼻町		二二七
同	畑尾源七	酒類商	猪鼻町		五〇
同	小山三省	煙草商	南町		五
同	原田要吉	米穀商	志義町		四二
同	吉田榮吉	書籍商	連雀町		二二六
同	松本伊助	魚類商	喜多町		五五
同	岩崎育太郎	洋物商	南町		二一
同	横關幸三郎	肥料商	志多町		七四
同	木下藤次郎	酒類商	高澤町		一九
同	林友平	肥料商	猪鼻町		五四
同	大野善太郎	吳服商	上松江町		一〇六
同	喜多欽一郎	水車業	坂下町		六七
特別議員	辰巳一男	工業學校長	郭町	(學校)	二〇六

◎川越商工會役員並商議員

會長	山崎博之	會社重役	志義町	電話 四六
副會長	綾部喜右衛門	金物商	南町	四五二
幹事	岩崎青太郎	洋物商	同町	二一一
同	伊藤長三郎	肥料砂糖商	高澤町	四
同	畑尾源七	酒類商	猪鼻町	五〇
同	戸田瀧藏	織物業	大工町	二三七
同	水村益三	米穀商	喜多町	七九
同	柴田善兵衛	白米商	江戶町	三〇三
同	清水友右衛門	荒物商	高澤町	一三〇
同	松本源之丞	織物業	志義町	一一
同	吉田吉之助	綿服商	連雀町	一七八
同	山本平兵衛	同	連雀町	二四
同	染谷小赤	同	同	一四六
同	服部新助	同	同	三三七
同	神島瀧藏	同	同	一一七
同	田口吉兵衛	同	同	二二四
同	瀧島藤五郎	同	同	五二〇
同	市川豐作	同	同	一七六
同	鹿戸安太郎	同	同	一四九
同	松本伊助	同	同	五五
同	相原芳太郎	同	同	一四四
同	仁村福太郎	同	同	一三六
同	印藤元右衛門	同	同	一六三
同	寺田彌平次	同	同	三二
同	町田甚兵衛	同	同	三二
同	小川菊太郎	同	同	三二
同	關根平藏	同	同	三二
同	大澤重助	同	同	三二
同	横田萬吉	同	同	三二
同	早川茂八	同	同	三二
同	矢島利三郎	同	同	三二

川越郷土鼈獅子舞後援會

會長	鈴木德次郎
顧問	武田熊藏
同	綾部利右衛門
同	喜多欽一郎
同	石川仁平
同	矢澤四郎右衛門
青年團長	岸市五郎
理事	井上勘兵衛
同	渡邊竹次郎
同	高山俊吾
同	綾部清三郎
同	横關幸三郎
同	内藤助治郎
同	久津間元吉
同	早川金十郎
同	野村芳彦
庶務主任	田中甲子治

大正十四年十月廿二日印刷
大正十四年十月廿五日發行

非賣品

發行所

川越郷土獅子舞後援會

編者兼
發行所
埼玉縣川越市大字川越三八七番地
井上勘兵衛

同
岸市五郎
埼玉縣川越市大字川越八三六番地

印刷者
青山博吉
埼玉縣川越市大字川越一四五〇番地

印刷所
株式會社青山印刷所
埼玉縣川越市大字川越一四五〇番地

不許
復製

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100



52
7

埼玉県立図書館



3 1030147

